



サステナビリティ基準委員会（SSBJ）非常勤委員を務めさせていただきます、東京海上アセットマネジメントの菊池です。30年以上資産運用に携わっており、サステナビリティ情報に様々な形で関係してきました。10年以上前になりますが、SRI ファンドを担当していた際、企業評価に必要なサステナビリティ情報をいかに引き出すかに腐心したことを鮮明に記憶しています。その頃は ESG という言葉は一般化しておらず、自主的な開示についても一部の企業で環境報告書が公表されている程度でした。SSBJ が設置され、その委員に任命いただいたことに、あらためて時代の大きな流れを実感しています。

サステナビリティ情報は、対象が広範であることに加え、時間軸が長期であることが特徴であると考えています。現在は、気候変動や人的資本に関する分野に注目が集まっていますが、今後も生物多様性など様々な分野が視野に入ってくるものと想定されます。また、サステナビリティ情報を取り巻く環境の変化が、加速していることも忘れてはならないと思います。受動的な対応に終始することなく、このような大きな変化に果敢に取り組むことが、企業価値向上を実現する絶好の機会となると思われます。

私は情報の利用者という立場にありますが、情報を出す側と情報を利用する側との協働を念頭に置きながら、建設的な意見発信をしたいと考えています。グローバルな視野を持ち、積極的に議論を積み上げていくことが果たすべき役割であると認識しています。

サステナビリティ情報に関して、利用者の観点から注目しているのがコネクション（コネクティビティ）です。サステナビリティ情報間のコネクションは、今後重要性が一段と増してくると思われれます。一例を挙げると、環境にはプラスに働くが一方で人権侵害しているなどということがないような、広い範囲を同時に見据えた取り組みが求められます。サステナビリティに関する取り組みの間にトレードオフが生じないように、情報のあり方を検討していく必要があると考えています。

コネクションの中でも、投資家としては、サステナビリティ情報と財務情報とのコネクションが最重要といえる論点です。この点については、財務情報開示と連携して議論を進めることも不可欠であると認識しています。サステナビリティ情報を企業評価や投資判断に活用するにあたり、非財務情報が一定の時間軸の中で、財務情報化するか否かが重要な分析ポイントになります。将来財務情報やプレ財務情報と表現される投資家にとって重要

## 委員長及び委員の紹介

なサステナビリティ情報の開示が充実し、企業価値向上に結び付くような基準開発に貢献したいと思います。